エリクソンと幼児教育 (17)

仁科弥生

同一性の形成　アメリカの場合(二)

アメリカの子どものしつけを情緒障害との関連において考察したエリクソンは、産業化とともに始まった機械的なしつけ方に批判的である。彼によれば、そのしつけ方には、人間をまるで産業界の規格化された付属品にするかのような、人間の身体をその誕生の直後から時計のような正確さで日課に適合させようとする傾向があり、その結果、それは子どもを標準化し、調整しすぎることになった。つまり、そのしつけは、アメリカ人のもっとも顕著な特質である個人主義を育てるどころか個性の仮面を大量生産するという危険を冒しているというのである。しかも、清潔や整頓、時間厳守などのしつけにあたって、母親たちは、できるだけ早い時間に子どもを「条件づける」ことが一番よいという「行動主義者」の唱える科学的スローガンにためらうこともなくとびついた。非常に幼い頃に訓練すれば最小限度の摩擦で、子どもは自動的に従うようになり、しかも最大の効果をあげるこ

とが期待できるという学説は、彼女たちにはもっともなことに思えたからである。しかし、子どもが自分自身を調整する能力をもつようになる前に子どもを条件づけようとして始める排泄のしつけやその他の訓練は、一方では子どもの自律性や自発性の発達を阻害する危険性をもはらんでいた。したがって、将来、一市民として自由な選択を行使することを期待されている人間を育てるには、このようなしつけ方は不適切である、とエリクソンは結論する。(『幼児期と社会』)

このことは、子どもたちが成長の過程で経験する生活の非連続の一つの例でもある。先に触れた自然児ジョン・ヘンリーは、成長して一人前の打鋲工になり、男らしい男はどんな機械にも劣らないという心意気をみせて、蒸気ドリルに対抗して一命を落としたという伝説の主人公になっている。彼は人間は人間としてのみ価値があるのだという信念を最後まで貫いた男であった。このヘンリーに象徴されるかっての開拓者の子どもたちは、今や機械に奉仕しなければならなくなった。そして近代生活の非個性的な機構の中で身動きのできなくなった自分に気づいたとき、青年たちは役割の、そして同一性の拡散状態に陥るとエリクソンは分析する。

すでに述べたように、青年期において、未来がはっきりした人生計画の一部となる。若者の第一の関心事は、自分はこういう人間であると描く自己像と比べて、広い世間の、また自分にとって大切な人々の目に映る自分はどんな人間だろうかということである。また、幼い頃から育ててきた自分の夢や希望、個性や技術をどのようにして、実社会の現実の職業や性の規範などに結びつけることができるだろうかということである。しかし、ここで若者は大きな危機に直面することになる。なぜなら、彼は自分の職業の選択については自由であるという暗黙の約束を信じていた。また自由な選択と決定という文化的同一性が彼の自己抑制にバランスを与えてくれるだろうという期待もあった。ところが青年になり大人になってみると、機械や機構との対決を迫られるからである。それらは複雑で、理解しがたく、その上、非人間的に独

裁的な力で彼の職業趣味を標準化する。若者は、容赦のない画一化によって押しつけられる役割というものを、自分を拘束し、類型化し、自分が魅力を感じる色々な可能性から自分を閉めだそうとしているものと受取り、彼の心に葛藤が喚起されるからである。そうして、誰も彼もさまざまな形で逃避しようとする。学校を中途退学する。仕事をやめる。人を寄せつけない気分に閉じ込もり、孤立する。時には非行的、逸脱的、自己破壊的行動に走ることもある。

エリクソンは、その具体的な例として、ヒッピーやビート族と呼ばれる若者たちのグループをあげている(『エリクソンとの対話』一九七一年)。すなわち、若者たちは自己の同一性を確立するために、色々な可能性に自分をかけてみようとする。しかし、大学への進学、昇進、高所得などを指向する社会的圧力が彼らの試みを一層困難なものにする。そこで、社会の要請や文化的同一性の諸要素を自己の同一性の中で調和させることができず、しかも自律性を誇りとし、自発性に溢れていると自認する若者は自分なりのやり方で自分に適する道を歩もうとする。そのようなモラトリアムを象徴する社会現象の一つとしてヒッピーやビート族、或は平和部隊をとらえることができるという。

ちなみに、津留らもヒッピーやビート族を次のように考察している(『青年期の比較文化的考察』一九七三年)。すなわち、彼らの多くは自分の出身階層である中流階級の価値観、たとえば賞賛や成功指向の考えに背を向けている。彼らが脱体制運動に参加することは、個人が数字化され、画一化されることに反逆し、産業化された大衆社会の価値を拒否しようとすることを意味している。また彼らが清潔を無視し、ものを共同所有し、愛や美を至上とすることは、中流階級の清潔を強調し、時間を厳守し、私有財産の獲得にこれつとめ、愛情までも出しおしむという価値観に反逆しているのである。また性交、マリファナ、麻薬に耽溺するのは、清教徒的な中流階級の倫理への反抗に他ならない。しかし、彼らの多くは、数ヵ月か数週間、そのような活動に参加するが、やがて再

びもとの中産階級の生活に戻っていくという。世界各地で奉仕活動に従事する平和部隊は、若者が自己を発見するために、一時的に家族、学校、職場から離れる機会を与える。そこで若者は自分の価値観や他人との関係を問い直す必要にせまられ、また新しい技術を学び、新しい考えや環境と出合い、心理的に成長をとげ、自己同一性を発展させることができる。いずれの場合も、モラトリアムとして、若者たちに、彼らが既成社会の圧力から一時的に解放され、人生や社会への新しい見方やかかわり方を見いだしていく機会を与えている。

青年期のそのような危機の過程で、若者たちの中には精神医学的治療を必要とする者もいる。すでに触れたように、アメリカでは独立独歩の同一性が強調される。それだけに、若者は成功も失敗も自分一人の責任で果たさねばならない。そのために情緒的葛藤も一層深刻なものであろうと思われる。エリクソンはオースティン・リッグス・センターでそのような若者たちの治療にあたった。彼らについて次のような考察を行なっている（『自我同一性』一九七三年）。

これらの若者は自分たちの社会から与えられる制度化されたモラトリアムを利用することもできず、かといって自分独自の猶予期間を自分の手でつくりだすこともできずに、精神科医のところを訪れたのである。彼らは、自我が同一性を確立する能力を、一時的にせよ失う結果、「急性の同一性拡散」状態に陥っていた、とエリクソンは分析する。この状態は、従来、前精神分裂病とか、妄想的、抑うつ的、精神病質的、その他の傾向を伴う重症の性格障害と診断されるのをつねとしていた症状であった。そして、それは、若者が「肉体的な親密さ」や「決定的な職業選択」「激しい生存競争」「心理・社会的な自己定義」などに同時に自分を賭けることを要求されるような諸経験に身をさらす自分に気づくときに、顕在化すると説明されている。

たとえば、ある女子学生は、保守的な母親によって過保護に育てられていたが、大学に入って背景の決定的にちがう青年たちと出合うことになった。彼女はこの青年

たちの間で親しい友を選択しなければならなかった。とりわけ、性関係で、根本的に異なる慣習に協調するか、拒否するかを選択せねばならなかった。しかも彼女は両親のどちらかがひそかに郷愁を抱き、しかも表向きはそれらを軽蔑している価値観や生活ぶりが、まったく異質な青年たちによって、こころよさそうに示されていることに気づいた。そして葛藤を伴う同一化をせまられ、心理・社会的な自己定義にあたって「選択の回避」を選んだのであった。それは外的な孤立と内的な空虚の感覚を引きおこし、彼女は退行の症状を示したが、さらにそれに続いて一種の麻痺状態をも起した。これを引きおこすメカニズムは、現実的選択を最小限にした状態を維持しながら、自分はいつまでも選択者のままでいるという内的確信を最大限にしておこうとする自我の働きである。そして、エリクソンは、このような同一性の拡散状態が青年期や或は成人前期という年代で起るのは、親密な仲間関係、競争、或は性的な親密さにかかわろうとするときに、潜在的な同一性の脆弱さが完全に顕在化してしまうからであると説明している。つまり、他人と本もののかかわりあいを結ぶことは、確固たる自己確立の結果であると同時に、自己確立の試練でもある。この自己確立がまだの場合、青年は、友情や性的な遊びなどの形での遊戯的な親密さを求めるときに、このような暫定的なかかわりあいが、同一性の喪失を引きおこしそうな対人的融合になってしまうのではないかという不安におそわれる。そのために、そのようなかかわりあいを控えたり、自分を内的に孤立させたり、せいぜい表面的な対人関係をもつだけになってしまう。時には逆に熱狂的なかかわりあいを繰返し求めては失敗し、陰うつな挫折状態に陥ったり、一番親密になれそうもない相手と親密になろうとしたりすることもあるという。エリクソンはこの親密さの問題を成人前期の課題として位置づけているが、それについては女性の同一性の問題とあわせて別の回で触れてみたいと思う。

　或は、同一性の拡散が原因で、自分の勤勉感覚の急激な崩壊に悩むという症例も紹介されている。それは、周

りから課せられたり、指示された課題に集中できないという形をとったり、読書過剰のような一面的な活動への自己破壊的な没入という形をとるという。患者の中には退行して、エディプス的な競争の問題が台頭し、集中能力の低下だけでなく、自意識過剰や競争への固執を伴う場合もある。たとえば、自分のことを大学に閉じこめられていると思うようになった青年は殆ど本ばかり読んで、失明しそうになった。それほどに彼は大学教授であった自分の父親に破壊的な過剰同一化をおこしてみたのである。彼は工夫に富んだ作業療法の中で、勤労感覚を取りもどすことができるような活動を見いだした。つまり彼は、自分が生まれつきすぐれた絵の才能をもっていた事実に気づいた。そしてこの描画が少しずつ彼自身の同一性の感覚の獲得を助けることになったと報告されている。

同一性感覚の喪失は、自分の家族や、身近な環境から、望ましいものとして示される役割に対する青年のきびしい軽蔑や憎しみという形で表現される場合もあるという。エリクソンはこれを否定的同一性の選択と呼んでいる。患者たちは同一性を放棄する代りに否定的同一性を選ぶのである。ある症例では、病的に良心的な両親から要求されるか、実際に実現されるかした極端な理想像に対抗して、自分自身の理想像の活動範囲を見いだし、それを固守したいという要求から否定的同一性を選んでいる。しかもこの場合、両親の弱さや隠された願望が子どもにはっきりと見抜かれてしまっている。たとえば成功した興行師の娘が、大学から逃げだして、南部のある都市で売春婦として逮捕された例や、南部の有力な黒人牧師の娘がシカゴで麻薬常用客の中にいるところを見つかってしまった例がある。これらについてエリクソンは次のように述べている。「このような場合、これらの役割を演じることの中に潜む、冷笑的、復讐的な見せかけに気づくことが、もっとも重要である。なぜならば、この白人の少女は、実際には売春をしていなかったし、その黒人の少女もまだ実際には常用者になってはいなかったからである。しかし、彼女たちがいずれも自分から社

会の底辺に身をおき、このような行動に対して烙印をおす決定権を、司法、執行機関や、精神医学的な機関に委ねてしまったのは事実だからである。……つまり否定的同一性のこの種の復讐的な選択は、利用可能な肯定的同一性の各構成要素が、お互いに帳消しにあうような状態の中で、明らかに何らかの自己支配力を再獲得しようとする絶望的な企てである。そして、このような選択の歴史は、患者の内的手段によっては達成不可能な肯定的役割から現実感を得ようと努力することよりも、想像したこともなかったようなものとの同一化から、同一性の感覚をひきだすことの方がよりたやすいような、そんな一連の状態の存在を示している」(『自我同一性』)

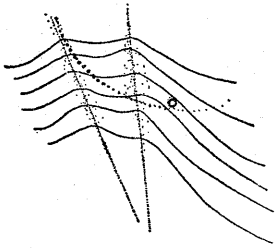
さらに患者の家族と幼児期における特殊要因として、彼らの親たちに共通する特性をエリクソンは次のようにまとめている。母親たちはより高い地位にのぼろうとする身分意識が強く、また、見かけだけの財産や「幸福」のために、誠実な感情や知的な判断上の問題を容赦なく切り捨ててしまおうとする。そして子どもたちに「まともなことをよろこぶ」社交性という見せかけを身につけさせようとする。しかも彼女は哀願的に、侵入的に子どもを愛する。また、人に認めてもらいたい要求の強い彼女たちは承認や是認に飢えると、幼い子どもたちにこみいった不平や父親に対する不満を聞いてもらおうとする。そして、子どもたちに向って、子どもたちの存在によって自分の存在が正当なものになるようにと嘆願する。また、非常に嫉妬心が強く、とくに子どもが父親に同一化しようとする試みや、子どもが自分の同一性の基礎を父親の同一性に求めようとする試みに対してはげしい嫉妬を向ける。これについて、エリクソンはとくに重要なこととして次のように述べている。「さらに附け加えねばならないのは、これらの母親が患者に対してとりわけ嫉妬深いことである。つまり患者たちは、(はじめから)母親からしりごみすることで母親を傷つけてしまうのであるが、ひとえにそれは、母親と患者の極端な気質のちがいに耐える力がお互いにないためにおこる。ところが実はこの気質のちがいは本質的な親和性の極端な

形での現われにすぎない。つまりこの親和性とは（引きこもろう）（または衝動的に行動しよう）とする患者の過剰な傾向と、母親の過剰な社会的侵入性とは、ともに高度の社会的な脆弱性という点で共通しているという意味である。父親が自分から女性を引き出しそこねたという、母親の執拗な訴えの背後には、患者（子ども）の方が自分から母親を引き出せなかったのだという訴えが存在し、深層心理としては母と子の双方にこのことが気づかれているのである」（『自我同一性』）そこには、母親の未熟で自己中心的な、しかも自己不全感に悩む人間像が浮き彫りにされている。

父親は成功者で著名な存在である場合が多いという。しかし彼らは妻たちに対して過剰な母親依存の傾向をもつので、家庭で妻たちに逆うことはない。その結果、父親もまた、自分の子どもに対して深層では嫉妬深い。また父親の指導力が発揮されたとしても、それは妻たちの侵入性には屈服し、或は妻を避けようとする。そこで母親が子どもたちに向ける要求はますます貪欲になり、哀願的になっていく他はないという。そこには子どもにとって精神的緊張がいやが上にも強いられたと結論せざるをえない環境が明らかにされている。

エリクソンらは、センターで、同一性の拡散をもとにする患者たちの諸要求に対応する治療計画として「作業療法」「芸術療法」と呼べるようなプログラムを企画し、若い患者一人一人に、彼らがすでに放棄してしまっている活気にあふれた自我の諸機能の再建に対する支持を提供するという課題に取りくんだのである。患者たちはその病院社会の中で、社会的な実験行為の第一歩を始めた。そこでは、患者自身の、そして仲間患者の、さらに病院スタッフらの要求に適切に対処しようとする共同体の計画に従ったり積極的に参加することが、その共同社会における人々の権利や義務として、患者たちにも要求された。彼らは企画をし、作業をし、奉仕をした。ものを作り、与え、人々を楽しませた。「不信以外の何ものも信頼すまい」という患者の決意の中にも、信頼に満ちた相互性を取りもどすための新しい経験を求める気持が

あった。治療者は、人生が信頼するに足るものであることを赤坊に教える母親の役割を引きうけた。また、親密な相互性や、その対極にある、自分にとって危険とみなされる人や力を分別をもって拒否することを彼らが再学習するための案内役となった。彼らは治療の過程で、特有な悪化の一時期を経験することもあった。エリクソンはそれを「どん底的態度」と呼んでいる。それは、退行の究極的な限界であると同時に、新しい再進展にとっての確固とした基盤となるどん底を模索する試みでもあると解釈されている。そして彼らは転移と抵抗を繰返しながら、自分の輪郭をもう一度はっきりさせる、つまり自己を明確化することによって同一性の基礎を確認し、同一性の感覚を獲得していったという。また病院環境として、受容的な看護婦や協力的な仲間患者、広範囲な活動をする有能な生活指導者たちとの出合いと支持が不可欠であることも報告されている。



参考文献

Erikson, E.H.,『幼児期と社会』仁科訳　みすず書房　一九七七

Erikson, E.H.,『自我同一性』小此木訳編　誠信書房　一九七三

Evans, R.I.,『エリクソンとの対話』岡堂、中園訳　北望社　一九七一

江藤　淳『成熟と喪失』講談社　一九七八

津留宏編『青年期の比較文化的考察』金子書房　一九七三